

家族構成の授業における教材としてのイラストの効果

柳 昌 子

九州女子短期大学初等教育科、北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2009年5月29日受付、2009年7月6日受理)

要 旨

家族援助論を受講する学生に「家族構成の多様性」を理解させるためのイラスト教材の効果について調査した。その結果、以下のことが明らかになった。

1. イラストは家族の年齢、性別、人数などが具体的であるため、文字情報に比べて共通の認識を得やすかった。
2. イラストに描かれた「暮らし方」に対する受け止め方は多様であり、イラストの「家族の表情や活動」に影響を受け易いものと受け難いものがあった。イラストの影響を大きくうけたのは、自分が体験していない暮らし方、生活感を想起しにくいもの、たとえば「大家族」などであった。他方、イラストの影響が小さかったものは、自分が実際に体験しているもの、またはジェンダーなど固定化された偏見であった。個人の特定の経験はイラストの影響を受けにくいことが分かった。
3. 以上の結果を踏まえると、家族構成の多様性を理解させるための教材として、構成は同じでも様々に異なるイラストを多く準備し提供するとよいということが分かった。

緒言

改正児童福祉法（2001）において保育士が名称独占資格として規定され、資格の法定化とともに、従来からの保育士の業務であるケアワークの他にソーシャルワークすなわち「児童の保護者に対する保育に関する指導」が課せられるようになった。今日の家族の教育機能の低下に対応した措置である。これを受けて保育士養成課程では新科目「家族援助論」が開設されることとなった。この科目の授業は社会学、心理学、社会福祉、保育学など近接領域の専門家によって担われることになったが、告示された「目標」達成のための授業内容、方法などは多様であった。この問題関心から長島らは、全国保育士養成協議会加盟の養成校の家族援助論担当者を対象としたアンケート調査を行い、使用教材等を明らかにするとともに、首都圏を中心とする大学等から6名の担当者の協力を得て面接調査を実施しその結果を紹介している¹⁾。そのなかに学生の授業評価に対する担当者のコメントとして「育った家族ではない『家族』を理解することが難しい」とあった。これは保育士のソーシャルワーク能力の育成上見過ごすことができない課題である。このことに如何に立ち向かうべきかということが本研究の課題でもある。

しかし他者の家族を理解することには多くの困難がある。一つには家族は学習主体自身がそのなかで暮らしており、日々体験する事柄は多様であるとともに直接的であるために、内面化された家族観は具体的で強力であることである。木暮は家族援助を考える上で保育に携わるものが、どのような家族観をもっているかを明らかにするため、選択肢によるアンケート調査ともに「家族とは」について記述させ、その文言を順不同に列記している。そして学生が「家族」というものを良いイメージで捉えているという結果を導きだしている²⁾。

家族理解の難しさの二つ目は、教師の側も自らの成育歴やライフスタイルに拠る家族観から自由ではないことである。教師が女性である時など、働く女性の立場から無意識のうちに「専業主婦」を擁する家族に批判的な立場をとる場合がある。さらに三つ目として「家族のあり方・考え方」に対して、公教育の名の下に時の政策が介入してくること³⁾である。

以上に挙げたような困難に自覚的に取り組むことなしに、他者の家族を理解させたり、理解することはできないと思われる。

これまで家族に関する授業を多く実践してきた家庭科教育では、家族の学習の目的として、個人として尊重されその幸福を追求したり健康で文化的な生活を営むために、それを実現する知識や技能、意欲とともに実践力を育成しようとしてきた。一方「家族援助論」の授業は、職業人として保育士を目指す者を対象に行われ、その家族理解は自分自身の幸福追求の枠を超えて他者の家族を理解し援助する能力の育成に直結することが求められている。

1. 目的

家族援助論の授業のために使用されるテキストの導入部分では、家族援助の課題を導くために子どもが育つ場としての「家族」の動向と現状を家族形態、家族規模などの変化から見ていくものが多い⁴⁾。家族形態の変化の説明のためにテキストに掲載されている家族類型別世帯数の変化の図表は、厚生労働白書等の図表より工夫されてはいるものの、家族型として呈示されている名称について学生のイメージを尋ねると、「夫婦のみ」では新婚夫婦あり高齢者夫婦ありだが、後者についてのイメージは具体的ではない。「夫婦と子ども」の子どもの年齢はほとんどが就学前である。「単独世帯」は単身赴任の「父親」と「学生」が多くイメージされ、いわゆる「独居老人」は思い浮かぶことが少ない。非親族については説明しなければほとんどイメージできなかった。そして何よりも関係を分類しただけの抽象的な枠組みからは家族の多様性や変化の理解を得ることは困難であった。事例分析などと違って家族の理論的な学習には興味を示さない学生が多い。なぜ家族形態の変化が家族援助の課題になるのかについての理解を深めるためには、家族の多様性とそこに内包された問題を把握する、より工夫された教材が求められるのである。

以下研究の経緯について述べる。家族の授業の中にスライド、ビデオ、絵画などイメージ情報が持ち込まれるようになるのは80年代に入ってからであるが、福岡県でも90年度の九州地

区技術・家庭科研究集会で発表された「育つ自分と家族を考える『保育』の学習」では、「小形桜子他、おかべりかの「絵」になる「いろいろな家族・いろいろな暮らし方」⁵⁾が使われた。生徒は前時学習でその15のイラストにそれぞれ感想文を付けて教師に提出している。そして本時の公開授業にはイラストごとにまとめて羅列された感想文が教材として用いられた。生徒は他者に知られずに自分の感想文を特定できたと思われる。授業では「どのような家族の形でも、受け入れて認めよう」という強いメッセージが含まれ、教師の思い入れの強さが見てとれた。生徒には自分以外の感想文を読み、自分のものと比較して考えを深めるというねらいが課せられた。授業は生徒のプライバシーなど内面をさらけ出させないように配慮され、発表してもよいと教師が判断しそれに応じた生徒のみが発表するという静かな授業であった。授業中に記された感想文はその後の検討会で明らかにされた。イラストの中になぜ「普通」（父と母と子ども）の家族型がないのかという生徒の書き込みについては検討の対象となったが、感想文のなかのイラストの一つに対して「うそ」と書いた中学生の感想が意味する貴重な問題提起は見過ごされてしまった。著者はそのことについてすでに別の論文⁶⁾で分析検討した。

本研究は3年間にわたる「家族援助論」の授業を踏まえ、その中でイラストを用いたこの手法を「現状における家族の多様さの理解」のために導入した効果について検討する。

2. 研究方法

本研究では調査Aと調査Bの2つの面から検討する。調査Aは中学生の場合と同様にイラストに感想文を書かせ、それをそのまま分析する。また調査Bでは、類似のイラストを並べて比較させ、その違いについて記述したものから、学生がイラストの何に影響を受けているかについて検討する。

調査A 家族構成を示すイラストへの感想

対象：短期大学2年生139名

日時：2007年10月および2008年10月

方法：感想文分析

使用したイラスト：おかべりかの「絵」による「いろいろな家族・いろいろな暮らし方」

中学生が使ったものと同じ15タイプのイラストをコピーし、それぞれに50字以内の感想を書かせた。なお原本はB5版の見開き2ページに描かれているが、今回は各イラストの下に感想を記入するための20cm²程度の吹き出しを付けたためにA3版の1枚とした。吹き出しの大きさを揃えるためにイラストを並べ替えたが、配置については特別な意図はない。指示は「この絵をみて感じたことをそれぞれの吹き出しの中に記入して下さい」である。

(1) イラストについて

調査に用いたのは15タイプのイラストである。今回の報告では9タイプに絞っている。以

下はそのイラストの見出しで括弧内は原版に付いている文言である。

- ①大家族
- ②祖父と女兒（おじいちゃんとふたり暮らし）
- ③離婚した母子（離婚したお母さんと子どもたち）
- ④パパと男児（パパと子どもたちの家族）
- ⑤母と息子（お母さんと息子）
- ⑥男の一人暮らし（ひとり暮らし）
- ⑦女の一人暮らし（ひとりで生活している人）
- ⑧女友達同士（友だちどうしの暮らし）
- ⑨再婚同士（再婚どうしのカップル）

9タイプのイラストを図1で示した。なお、15タイプのうち本研究から省いた6つのイラストは、「おじいちゃんとおばあちゃんと猫の家族」「男の人たちで子どもを育てている」「仲よしの男の人や女の人どうして住む」「2組のお母さんと子どもたちがいっしょに暮らしている」「子どもがいなくて養子をむかえた家族」「親しいなかまどうしの大家族」であった。中学生⁷⁾及び短大生の感想のなかで、「よく分からない」、「信じられない」、「珍しい」、「おかしい」、「ひどすぎる」等の書き込みが多かったタイプである。



図1 9タイプのイラスト

(2) カテゴリー化の手法

それぞれの感想文からキーワードを抽出した。1つの感想の中から複数のキーワードを拾った。それを以下の6つのカテゴリーに整理し集計した。キーワードの抽出とカテゴリー分けの作業は図2のようなのである。

<6つのカテゴリー>

①家族・暮らし方のイラストへの賛否

記述内容全体としてイラストに対して肯定的であるか、否定的であるか、あるいは条件付き（条件次第）であるかを読み取り、以下の3つに分けた。

- a. 肯定的（例：楽しくていいと思う）
- b. 否定的（例：実際はこんなに楽しいものではない）
- c. 条件しだい（例：お金に困らなければ楽しそうでよい）

②表情・活動・人物の組み合わせの影響

- a. 顔の表情に影響を受けている（例：楽しそう。優しそう）
- b. 活動の様子に影響を受けている（例：元気に前向きで暮らしていそう）
- c. 年齢、性別などの組み合わせに影響を受けている（例：男の子二人だから大変。再婚も子どもが幼児だからまだいい）

③記入者の視点

- a. 子ども側（例：おじいちゃんのために家事をするのかな、大変そう）
- b. 大人側（例：子育ての相談ができ互いに支え合えて安心だ）
- c. 双方（例：母は息子を頼りにしており、息子も母を大事にしてそう）

④イラストから読み取った役割分担などの記述（例：子どももお手伝いしそう）

⑤イラストから読み取った人間関係の記述（例：仲良し。もめごとが多いはず）

⑥好き嫌いの記述（例：私もやってみたい。私はこのような関係は嫌いです）

⑦将来への言及（例：おじいちゃんが死んだらどうなるのだろう。息子が結婚した時もめらだろう）

⑧イラストについての状況説明あるいは解説（例：これはできる女。結婚より仕事を選んでバリバリ働いている）

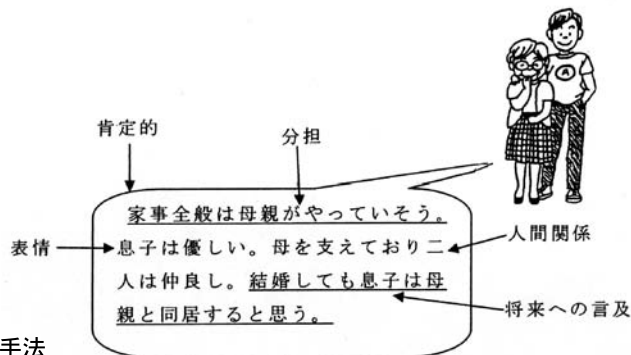


図2 カテゴリー化の手法

(3) 結果

1) 対象の短大生の状況

先述した木暮にならって本研究の対象者である短大生の家族意識の概略をみておこう。家族に関わる講義に入る前に家族観について記述させた。重複分を除いて列記してみると表1の通りである。

表1 学生の家族観（自由記述）

(重複を除く)

何でも話し合える	生涯生きていく上で絶対必要な人
互いが思い合い、無償の愛情でつながっている	たとえ結婚して家を出ても兄弟は家族
1日1回でも揃って食事する	亡くなった祖父祖母と一緒に暮らしたなら家族
祖父母から嫁に行った兄妹、いとこ、親戚も含む	近くにいても心がバラバラなら家族ではない
血と情のつながりがある	帰ることのできる居場所
互いに家族だと思っていること	楽しいこと悲しいことを話すことのできる場
絆があること	自分が自分でいられる心のやすらげる居場所
どんなに裏切られても味方であること	血のつながりが無くても経済的に援助
他人とは違う想いの形、強さ	自分の心配やしつけをしてくれる
どんな時にも最後まで信じられる人	早く帰りたい顔が見たいと思えるような場所
気を使わず何でも言い合える	法律で認められている関係
血は繋がってなくても深い愛情を育んでくれる	何かあったら連絡をとる人（万引き等で捕まる）
食事や洗濯等生活に必要なことを協力して行う	友人とはまたちがう絆がある
子どもが安心して暮らしができること	支えてくれた（洗濯、食事、看病）
いろんな苦難を共に乗りこえ幸せを共感する	誰かが帰ってこない心配になる
心の拠り所	生活面での援助をしてくれる
自分の事を心配をしたり叱ってくれる存在	困った時は助け合うのが家族
お互いを支え合いやすらぎを与え合う存在	生活に困らない程度の収入があり生活ができる
自分の悪い所も弱いところもさらけ出せる存在	養育し、養育される関係
大切だと思う人は家族だと思う	生まれて初めて人間関係のできる相手
善悪を素直に言い合い、誉め合う	全般的な金銭面での支援
自分の父・母・姉・妹・ペット	学校行事への参加・保護者参観
他から許せないことでも、許せたり許して貰える	愛情があればペットも家族
理由もなく思いやれて生活を保護してくれる	見返りもなく相手を受け入れる
互いに育て世話をし合う相手	わがママが言える
目をつぶり家族はと考えた時に顔が浮かぶ人達	

自由記述の中の語をピックアップすると、「何でも話し合える」をはじめとして、信じられる、無償の愛、絆、味方、協力、安心、共感、保護、やすらぐ、支えるなど、今回の受講生の場合でも「家族」というものを良いイメージで捉えているということが分かる。このイメージの形成に関わるとおもわれる属性を探てみると、まず学校での学習機会では学校段階別に小学校(79.4%)、中学校(81.0%)、高等学校(54.0%)となり、教科別では家庭科が多く(69.4%)、次いで社会(19.4%)、道徳(12.9%)であった。学校教育以外からの情報として家族を想起させた小説では、「1リットルの涙」「東京タワー」「I'sと呼ばれた子」が同じ程度あがり、他は分散した。映画では「ALWAYS 3丁目の夕日」次いで「I am サム」、そしてテレビドラマでは「一つ屋根の下」「アットホーム・ダッド」が上がった。テレビアニメでは「サザエさん」を筆頭に「ちびまる子ちゃん」「クレヨンしんちゃん」「ドラえもん」の4つが多かった。このような家族観のままでは、支援あるいは援助すべき家族の深刻で現実的な家族問題に向き合う意欲を喚起するのは難しいと考えられる。

3) イラスト別の特徴

9タイプのイラストへの感想を一括して示したものが表2である。タイプ別に概要をみてみる。

表2 家族・暮らし方のイラストへの感想 カテゴリー別記入率(%) n=139

家族型 カテゴリー	大家族	祖父と女兒	離婚した母子	パパと男児	母と息子	男の一人暮らし	女の一人暮らし	女友達同士	再婚同士
賛否：記入率	97.1	87.8	77.0	84.2	78.4	76.3	76.3	94.2	92.8
肯定的	79.1	53.2	39.6	47.5	53.2	25.9	56.1	41.0	23.7
否定的	3.6	14.4	22.3	17.3	11.5	36.7	8.6	24.5	24.5
条件付き	14.4	20.1	15.1	19.4	13.7	13.7	11.5	28.8	44.6
影響を受けた部分：記入率	52.4	60.4	48.2	50.4	75.5	55.4	54.7	50.4	35.3
顔の表情	34.5	15.1	12.9	6.5	26.6	12.2	11.5	2.9	6.5
活動の様子	16.5	30.9	29.5	33.8	48.2	43.2	43.2	46.8	24.5
年齢や性別等組み合わせ	1.4	14.4	5.8	10.1	0.7	-	-	0.7	4.3
記入者の視点：記入率	13.0	64.0	74.8	59.7	71.2	-	-	-	78.4
子ども側	8.6	36.7	33.8	23.0	30.2	-	-	-	41.0
大人側	2.2	7.9	23.0	18.0	17.3	-	-	-	20.9
双方	2.2	19.4	18.0	18.7	23.7	-	-	-	16.5
役割分担の記入率	10.8	7.2	19.4	23.0	12.2	-	-	12.9	0.7
人間関係の記入率	42.4	31.7	25.2	22.3	43.9	-	-	52.5	62.6
好き嫌いの記入率	0.7	1.4	0.7	0.7	0.7	0.7	5.0	15.1	2.9
将来への言及の記入率	2.9	25.2	8.6	11.5	10.8	2.9	0.7	17.3	25.2
解説・状況説明の記入率	5.8	17.3	18.7	17.3	13.7	36.0	32.0	5.8	4.3

①「大家族」に対しては記入率が97.1%と最も高く、しかも肯定的な感想が最も多い。イラストの表情に影響を受け易く、人間関係について言及する率も高かった。比較的最もあって

多かったキーワードと延べ件数をあげてみよう。イラストに直接影響されたと思われるものでは「賑やかそう」50件、「楽しそう」48件だった。暮らし方への言及として「嫁姑問題、世代間の人間関係が大変そう」16件、「多人数で家事や家計が思い遣られる」11件が目立った。

②「祖父と女兒」に対する記入率は87.8%で、半数が肯定的であった。イラストの表情よりも活動の方に約2倍の多さで影響を受けており、年少者と高齢者という年齢の組合せにも影響がみられた。記入者の視点は大人側より子どもの側にあった。「優しい子だ」が39件、「本当は寂しい、不安だと思う」が18件であった。「もしおじいちゃんが死んだら」16件をはじめ「孫娘が思春期になったら」など将来への言及が25.2%と9タイプの中で最も高かった。このタイプには祖父と孫というこの組み合わせになった原因について「両親の事情で預けられている」など想像して記述する者が5件あった。

③「離婚した母子」に対する記入率は77.0%で、肯定的な意見は9タイプのなかで7番目、はっきりと否定的なものが2割を超えている。記述者の視点は子どもの側からのものが母親側よりも多く、「母を助けている」27件、「楽しい」12件、「寂しい」19件であり、父親のことに触れたものが10件あった。母親の側に立った感想では「家事・仕事・家計が大変」が33件、「母は頑張っている」12件であった。

④「パパと男児」に対する記入率は84.2%で、肯定的な意見は離婚した母と子のタイプよりも高かったが、記述者の視点は同タイプよりそれぞれ低率ではあるものの類似している。父親の側では「家事育児が大変そう」39件、「お父さんは頑張っている」15件で、子どもの側では「将来しっかりした逞しい子に育つだろう」22件、「寂しい・母が恋しい」が26件あった。イラストの状況説明として「スポーツ大好き父子、ジョギング中、楽しく元気」といったものが合わせて30件あった。また離婚した母子が「離婚」と明記されているのに比べるとこのイラストにはその表記が無いため、父子だけになった原因として「お母さんは病院にいる」「お母さんは昨年死んだ」など解説的なものがあった。

⑤「母と息子」に対する記入率は78.4%で、約半数が肯定的であった。そして顔の表情や母親の肩に手を置いた息子の仕草に大きな影響を受けていた。記述者の視点は子どもの側のものが30.2%と多く、「母を思う、母を守る、支えている」に54件、「自立できない、マザコンばい」に28件であった。母親の側では「母は嬉しい、幸せ」に29件あった。そして親子双方に言及した「お互いを頼りにしている」「助け合って仲良し」などの率は、親子が関わる6タイプの中では一番多かった。

⑥「男の一人暮らし」と⑦「女の一人暮らし」、つまり一人暮らしでも性の異なるイラストに対する感想を比べてみる。記入率では男の一人暮らしも女の一人暮らしも同率の76.3%であったが、賛否は大きく分かれた。肯定的な意見は女の一人暮らし56.1%に対して、男の一人暮らしは25.9%であり、後者は9タイプ中最低であった。両タイプとも顔の表情よりも背を丸めた男と胸を張って闊歩する女というイラストの活動に影響を受けており（両タイプとも43.2%）、

男の場合、持ち物から「単身赴任者の買い出し」と見るか、「画家が写生に出掛ける場面」と見るかで感じ方は違った。女に対しては「仕事帰りのキャリアウーマン」とほぼ感想は一致していた。またイラストの状況説明や解説も多く(36.0%と32.0%)、一人暮らしになった理由や暮らし方の内容が記述されていた。男の一人暮らしのキーワードで多かったのは「家事が大変」53件で、生活に関わるその他の書き込みには「食事が偏る」「不潔」など否定的なものがみられた。「自由気儘」28件で、「自立」は9件だった。

これに対して女の一人暮らしは、「キャリアウーマン」「経済力もあり仕事中心」合わせて57件であった。「自由」の書き込みはなく「自立」に37件あった。

⑧「女友達同士」に対する記入率は94.2%と大家族に次いで高かった。肯定的な意見は41.0%あり、「もめ事がなければ楽しいだろう」といった条件付きが28.8%と9タイプのなかで2番目に多かった。若い女性3人が調理をしたり大工仕事をしたりという活動を示すイラストが影響を与えており(46.8%)、対象者自身の寮生活を想起させたと思われる書き込みが見られた。肯定的なワードは「楽しい」68件、「協力できる、相談できる」51件で、否定的なもので多かったのが「喧嘩・揉め事(特に金銭問題)」51件、「プライバシー・自分の時間がもてない」に13件あった。

⑨「再婚同士」に対する記入率は92.8%で、肯定・否定が拮抗しており、逆に条件付きが44.6%と9タイプ中最も高かった。感想文も比較的長くキーワードが抽出し難かった。大まかには「子供同士がうまくいけばよい」「再婚相手の子どもとの関係次第」「子どもが小さいうちはいいと思う」「慣れたらいいと思う」などに纏められた。記述者の視点としては子ども側が高かった。人間関係に言及する者も多く、将来への言及も「祖父と女兒」と同率で最も高かった。

調査B 同じ家族構成の異なるイラストへの感想

学生たちはイラストの何に影響を受けているかについてさらに検討するために以下の調査を実施した。

対象：調査Aの対象者とは別の大学3年生34名 2ヵ年の「保育学」受講生

日時：2007年6月および2008年6月

方法：感想文分析

(1) 比較に使用したイラストについて

前述した小形桜子他、おかべりかの絵による『いろいろな家族・いろいろな暮らし方』と、牧野カツコ編集の「家庭科ワークブック」⁸⁾から同じタイプの家族・暮らし方を選び並べて感想を求めた。図3はそのイラストである。

(2) 異同の判別

同じ家族構成(タイプ)の異なるイラストを並べて提示し、どのように感じるかについて

自由記述方式で尋ねた。あえて「違いについて」を指示しなかったため、イラストごとにそれぞれの感想が書き込まれる場合もあった。その場合は「同じ」と感じたか「異なる」と感じたかを文面から判断して集計した。



図3 ポプラ社刊(ポ)と国土社刊(国)のイラスト

(3) 結果

表3はその結果である。

表3 同じタイプでイラストが異なる場合の受け止め方の異同：ポプラ社刊と国土社刊の比較(%)

	大家族		祖父と女兒		母と子		父と子		母と息子		男の 一人暮らし		女の 一人暮らし	
	同	異	同	異	同	異	同	異	同	異	同	異	同	異
2007年度・16名	43.8	56.3	56.3	43.8	12.5	87.5	31.3	68.8	68.8	31.3	31.3	68.8	12.5	87.5
2008年度・18名	38.9	61.1	66.7	33.3	38.9	61.1	44.4	55.6	72.2	27.8	50.0	50.0	38.9	61.1
計34名	41.2	58.8	61.8	38.2	26.5	73.5	38.2	61.8	70.6	29.4	41.2	58.8	26.5	73.5

同じタイプでイラストが異なる場合の受け止め方の異同について調べた結果、年度を渡っても感じ方、受け止め方に共通性があることが分かった。タイプごとに具体的に異同の内容をみでみる。

①「大家族」について：両年度とも「異なる」がやや多いことで共通している。ポプラ社刊のイラストの方に好意的で、イラストの人物の配置や表情、しぐさから「女性が強くもめごと多そうだが、賑やかで楽しそうだ」といった感想が多かった。それに比べると国土社刊は「男が仕切っている。みんなつまらなそう」「集合写真のようだ」が見られた。

②「祖父と女兒」について：活動内容も表情も異なるにもかかわらず両年度とも「同じ」がやや多いことで共通している。

③「母と子」について：両年度とも「異なる」が多いことで共通している。とくに2007年度の学生では87.5%もの学生が異なった感じ方をしている。ポプラ社刊のイラストの説明に「離婚した」が付されていることに影響を受けている。イラスト自体ではポプラ社刊は「元気で楽しそうだが暮らしが見えない」に対して、国土社刊は「よく見慣れた親子の買い物風景」とあった。

④「父と子」について：母と子のイラストほどではないが、両年度とも「異なる」がやや多いことで共通している。感じ方の違いも母と子のイラストの付けられた感想と類似していた。ポプラ社刊の方は「暮らしの内実が見えにくいのでただ楽しい親子である」が多く、一方国土社刊には「母と離婚した父親が子どもの面倒を看ている」「母がいないので子ども達は父親に甘えている」といった具体的な状況説明がついた感想が多かった。

⑤「母と息子」について：両年度とも「同じ」が多いことで共通している。しかし活動、性別や年齢の組み合わせはほぼ同じに見えるものの、ポプラ社刊は「息子が大学生で母に依存している」が、国土社刊の方の息子は「会社員で稼いでいる」とする感想が見られた。服装の違いから息子の状況を判断し、母子関係を想像していることがわかる。

⑥「男の一人暮らし」について：「異なる」が多いのは2007年度の受講生で次の年は半数であった。ポプラ社刊はその男性の持ち物を画板と見たのか「信念をもった独身の画家」とみなし「自由」とか「気まま」が多く、「わびしい」と書いたのは一人だけだった。これに対して国土社刊では洗濯物を干すという活動内容から「単身赴任者」との見方がなされ、「さびしい」「わびしい」「生活が大変」といった感想が多くを占めた。

⑦「女の一人暮らし」について：両年度とも「異なる」が多いことで共通している。とくに2007年度の学生では87.5%もの学生が異なった感じ方をしている。ポプラ社刊のイラストの女性は「キャリアウーマンで仕事と自分の生活を割り切って楽しんでいる」。一方国土社刊の女性は「趣味に生きるおとなしい優しい人」とのイメージが強かった。

3. まとめ

以上をまとめると以下の通りである。

1. 家族の「多様性」を「家族の構成」の視点からとらえさせようとする場合、絵画化された教材は家族の年齢、性別、人数などが具体的であるため、文字情報に比べて共通の認識を得やすいことが分かった。
2. イラストに描かれた「暮らし方」に対する受け止め方は多様であり、イラストの「家族の表情や活動」に影響を受け易いものと受け難いものがあった。

イラストの影響を大きくうけたと思われるものは、自分が体験していない暮らし方、生活感を想起しにくいもの、たとえば「大家族」など。他方、イラストの影響が小さかったもの、すなわちイラストとは関係なくそのタイプから浮かんだ感情に支配されたと思われるのは、自分が実際に見聞きしたり体験しているもの、または固定化された偏見と思われるものであった。個人の特定の経験は影響を受けにくいことが分かった。最初に述べた、中学生が「うそ」と書いたことに通じる。

イラストのなかで影響を与えやすい部分としては、「顔の表情」よりも、「活動」と「年齢や性などの組合せ」であった。また、イラストは単独でなく比較対照ができるイラストが提示された場合の方が暮らし方についてのイメージが広がることが分かった。

今回の結果から今後は次のような面を検討していきたい。

- (1) 家族の学習においては同一の家族構成についての多様な理解を得たり、暮らし方の内実に迫ろうする意欲を引き出すことができるような教材の開発を検討すること。
- (2) 家族や暮らしのイラストや写真などイメージ情報は、対象の共通理解を得易い反面、それに対する感じ方や受け止め方は多様であるということ認め、個人の具体的な体験を対象化させる授業の工夫が必要であること。そのためには使用するイメージ情報の質を検討すること。

なお、本研究の一部を日本家庭科教育学会第51回大会において発表した。

注

- 1) 長島和代・阿部和子・米山岳広・大久保秀子『保育士養成における「家族援助論」の研究Ⅲ－家族援助論に関する教材研究』小田原女子短期大学研究紀要 第38号 pp.52-61
- 2) 木暮美香『家族援助についての考察(1) 家族観に関する調査を通してー』育英短期大学研究紀要 第21号 2004.2 pp.1-16
- 3) 例えば2008年2月24日に開催された全国教育問題協議会の「教育シンポジウム2008」では、学習指導要領改定案に対して「現行に規定がない家庭・家族の価値について公民科・家庭科に記述する」など5項目をまとめた要望書を当時の山谷えり子総理大臣補佐

官に提出している。

- 4) 上掲1) で長島らは2005年調査時点で、82校の回答から9種類のテキストが上げられたことを明らかにし、その内容を掲載している。著者は「松本園子・永田陽子・福川須美・堀口美智子『実践家族援助論』ななみ書房(2007)」を使用しているが、この部分の内容や項目はそれと類似している。
- 5) 小形桜子・三井富美代・江崎泰子『こころとからだ知りたいこと事典』(おかべりか絵) ポプラ社 pp.14-15(1984)
- 6) 柳昌子「変化する家族と『家族』の授業」 大学家庭科教育研究会編『男女共学家庭科研究の展開』所収 pp.167-183 法律文化社 (1993)
この公開授業については日本家庭科教育学会九州地区会編『家庭生活領域の研究と実践』家政教育社(1993)でも取り上げられた。
- 7) 同上「変化する家族と『家族』の授業」 pp.180-183
- 8) 牧野カツコ編著『人間と家族を学ぶ 家庭科ワークブック』p.54 国土社(1996)

Learning effect of illustration in class of family structure as teaching material

Masako YANAGI

Department of Elementary Education, Kyushu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

I try to make clear the effects of teaching material using an illustration for students who learn the family support theory to understand the variety of family structure. The results are as follows;

1. Illustrations which specify the age, sex, and family members were more effective to understand the family structure than the lettered information.
2. Illustration which specify "the life style" were accepted differently by the students. Illustration which specify the "the family activity and impression" were influential to the one group, but not influential to the other groups. Most influential illustration were the unexsperinced or nonactual family image such as large family. The illustration which were non influential were the already experienced image of family and stereotyped prejudice about families such as gender.
3. To understand the diversity of family structure, it is valuable to prepare different illustrations about same family structure.

Keywords : teaching material illustration family structure